



多目的スポーツ活動、スイミング教室、サッカークラブなど、さまざまなスポーツクラブを展開するウイル大口スポーツクラブ。平成14年に設立され、現在ではスポーツにとどまらず文化活動や高齢者向け地域サロン活動など多岐にわたる活動をしています。

今月と来月2回に分け、大口町で生まれ育ったウイル大口スポーツクラブの誕生と変遷を特集します。

地域スポーツの担い手として1

vol.1

ウイル大口スポーツクラブ

子どもを取り巻くスポーツ環境の変化

平成12年ごろ、少子高齢化や核家族化が進み、子どもの外遊びやスポーツをする時間、空間、仲間が減少するなど子育て環境が変わる中、学校では児童生徒数が減少したことで教員も減少し教師の負担増や指導者不足が問題視され、小中学校の部活日数や種目が少なくなりました。さらに、ゆとり教育の一環で平成14年度から小中学校に完全週休2日制が導入。それらが複合的に重なり、週末の子どもの活動を支えるため、地域での受け皿の必要性が増してきました。

そうした受け皿としての「総合型地域スポーツクラブ」について、国は「育成マニュアル」を作成し、地域主導のスポーツクラブの普及に努めました。総合型地域スポーツクラブとは、「多目的・多世代・多志向」つまり、地域住民が主体となった運営による、あらゆる世代がさまざまなスポーツを楽しみながら体験できる地域主導のスポーツクラブです。

大口町でのスポーツクラブ設立に向けての始動

平成12年4月に「(仮称) スポーツ振興団体設立準備委員会」を設立。町内でスポーツに関わる各団体の代表メンバーが集まり、今までの枠に捕らわれない子どもたちの環境づくりや町内でスポーツ関連事業を一括して担える団体の設立に向け、手探りの話し合いが進められました。

その話し合いは、当時の体育協会長である故尾関道弘さんや理事長の故徳田辰平さんを中心に体育協会、体育指導委員会、スポーツ少年団、学校関係者、子ども会、青年会議所、一般のスポーツ愛好者、生涯学習課職員など総勢20名で進められました。

「集まった当初は、正直集められた目的もよくわからない状態で、『総合型地域スポーツクラブ』という言葉も浸透していない状態でした」と当時の生涯学習課職員。そんな中、町内の子どもたちを取り巻く環境の現状の把握や課題を整理することからはじめ、どのような解決策があるか、どのような組織作りが有効なのかを検討していききました。

当時の先進地である半田市の成岩なりわ

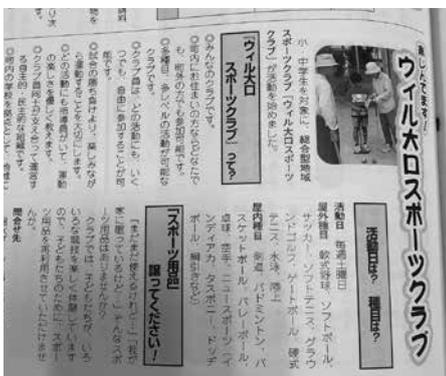
スポーツクラブへも視察に行き、活動を参考にしながら話し合いを進めました。

「手探りの状態ではありませんが、メンバーの皆さんはボランティア精神が旺盛で地元を思う気持ちは人一倍。特に子どもたちに対しては指導をおこなう計画にも抵抗なく、話し合っていくうちに、ぜひとも大口町子どもたちにもいろいろなスポーツを体験し、努力の大切さなどを味わってほしいという熱意で意見がまとまっていきました」部活や習い事では何か一つのスポーツを選ぶと他のスポーツを体験する機会が持てなくなるという現状がありますが、そういった課題を解決するのも総合型地域スポーツクラブの役割として捉えられていました。

また、総合型地域スポーツクラブの条件の一つは「自主自立」。行政からの財源を当てにすることをなく、



会員からの会費や事業を行って得られる自主財源で運営し、それにより永久的に持続する組織となるのが必須条件です。ウイル大口スポーツクラブは、スポーツ教室の他にもイベント参加費を得られる事業をおこなっています。さらには、成岩（なるわ）スポーツクラブと同様に発足から1年後に町内施設の指定管理業務もおこなうことになりました。



▲広報おおぐち平成14年7月号より

「いつでも、どこでも、誰でも」

平成14年4月、ウイル大口スポーツクラブが発足。初代事務局長に、南小学校長を退職された故長谷川哲也さんが就任し、次年度のNPO法人認定まで精力的に尽力されました。

初年度は「子どもたちにさまざまなスポーツを体験する機会を与えたい」という目的のもと、多目的スポーツ活動から始めました。現在もなお人気の多目的スポーツ活動。人気の秘密は、ひと月2000円という安価な料金で毎週土曜日に好きなスポーツに参加できることです。種目は野球、サッカー、バスケットボール、卓球などの人気スポーツを始め、剣道、バドミントン、キッズダンスなど、道具の用意や手ほどきの必要性などで手軽にはできない敷居の高いスポーツも。初年度は10種目から始まり、今ではのべ26種目（小学生16種目・中学生8種目・成人2種類）のメニューがあります。道具も貸し出ししているので金銭面での心配もなく気軽に体験することができます。指導者は町内の体育協会やスポーツ推進委員のみなさん。「地域の子どもを地域の大人で育てる」というコン



セプトに賛同したみなさんが、ボランティアで指導にあたっています。指導者のみなさんにも世代間交流や技術の伝達などのやりがいがあります。地域の活性化にも一役買っています。また、教室の間は付き添いも必要なので保護者が付き添えなくても参加することが出来ます。「いつでも、どこでも、誰でも」は、現在もウイル大口スポーツクラブの合言葉として浸透しており、どんな人でもスポーツの楽しさを味わうことができ、自分に合った方法で親しむことができるようにという、当初の目標が今も実現できている活動です。

地域の有力チーム育成

2年目にはNPO法人という法人格を取得し、いよいよ本格的に地域のスポーツクラブとしてスイミングクラブ、サッカークラブも始動しました。スイミングクラブは、町の温水プールを使って町がおこなっていたスイミング教室を、折しも屋根の修理で休業していたタイミングで譲り受けることにより始まりました。

サッカークラブは設立委員の一人であった古田政一さん（現事務局長）が会社に勤めながら地元で作った少年サッカーチームをそのまま引き継ぐ形で始動。名称も任意団体だったときの「尾張クラブ」を引き継ぎました。スイミングもサッカーも、競技を



こよなく愛し、子どもたちに伝えていきたいという熱意を持った、主に地元出身の指導者を獲得できたことで、20年近く経た今は強豪クラブとして発展しています。水泳の会員は1000人ほど、サッカーの会員は300人ほど在籍し、全国大会で活躍するほどに成長したメンバーも輩出しました。この活躍は来月の特集で紹介したいと思います。

地域の総合型クラブへ

設立から18年を経た現在、ウィル大口スポーツクラブの活動は子ども向けスポーツ教室だけでも多種目スポーツ活動、陸上ホッケー、テニス、ミニバスケットボール、バレーボール、幼児・園児体操、チアダンスと

たくさんの方の選択肢を取り揃えています。

また対象を大人や高齢者にまで広げ、住民全般の心身の健康を増進する活動を展開しています。シニア向けサッカークラブ、60歳以上を対象としたのびのび健康体操教室、「のまない・すわない・かけない」を合言葉にした健康麻雀倶楽部、地域の学共へ出張もおこなうたごえ喫茶など、住民のみなさんの健康増進の場としてだけでなく交流の場としても活用されています。

文化面でも生き生き土曜学校、ブログラミング教室など、子どもたちの教育面でのサポートにも力を入れています。



取材にて

近年、中高年のランニングブームや次々とオープンするスポーツジムなど、健康に目を向ける人の増加は目を見張るものがあります。「スポーツといえば、運動神経の良い人がやること…」という常識がくつがえされつつある時代の流れを誰もが感じているのではないのでしょうか。大口町は18年前にそのような時代の流れを一早く察知し、全国に先駆けて「総合型地域スポーツクラブ」の設立を手掛けました。大人も子どもも高齢者も、スポーツが得意な人もそうでない人も、また時間がある人もない人も、あらゆるニーズに応えたさまざまな講座を用意し、地域の誰もが楽しむことができるクラブを目指しました。

来月号では、現場で教えるコーチのみなさんに現場ならではのエピソードや抱負をお聞きし、併せて、今後ウィル大口スポーツクラブが目標とする理想のスポーツクラブ像や地域の中で果たしていきたい役割を語っていただきたいと思います。